

第 2 号
1995. 10. 21

ゾーン・システム研究会々報

Photographic Society of Zone System

発 行 者
中島 秀雄

編集部: 東京都港区西麻布4-2-10東城ビル401 ゾーン・システム研究会事務局

平木 収 先生 講演会 特集

※去る、3月4日(土)早稲田奉仕園にて、皆様も良くご存じの平木先生の講演会で収録した講演内容を、何回かに分けて皆さんにご紹介いたします。尚、この講演会の内容は、平木先生のご厚意により、会報に載せることができました。当日は雪の降る寒い日ではありましたが、平木先生の熱弁で会場が暖かく感じました。平木先生は、元 川崎市民ミュージアムの学芸員を勤め、ゾーン・システム研究会が出来たのも、川崎市民ミュージアムにいらした平木先生 企画のグレードアップ・フォトグラフィーが原点になっております。現在の平木先生は、写真評論、学校講師、審査員、展覧会その外、色々な分野で幅広く活躍されております。

【講演内容】

※川崎市民ミュージアムとして興味があって、やりたかったことで出来ることはワークショップの開催だったんです。ござんじの通り川崎市民ミュージアムには暗室で8台のブースがありワークショップを行おうと考えました。ところが僕も写真学校で長いこと教えていますが実技を教えているわけでもないの、どうしようかなと思ってたんですよ、やっぱり初歩の講座からやるのがまっとうなんだろうけど、でもやはり特異性と言うか面白みのほうから入っていった方がいいだろう、それで思いっきり、いきなり最上級のコースから始めたんです。それがゾーン・システムの講座でたまたま川崎市在住で中島さんと言う方を、ちゃんと覚えておきましたので、口説いて来て頂き、館の様子を見て頂いて、設備などもチェックしてもらい、始めは暗室の回りの壁が全部グレーだったんですけど、それをアドバイス頂いて黒く塗り直したり、暗室電球の改良をしたり等、不完全ながら暗室の準備が整って第一回の申し込みを受けたところ、実はご存じの方がいらっしゃると思うんですが赤羽さんですね! 長野から通って来るという人がいましてね、始めはハードなコースだったんです。週一回の2ヶ月、いや3ヶ月でしたかね、それを赤羽さんは朝の各駅電車通って来るんですね、凄い根性の人で、その後は名古屋から来られた人、焼津から来られた人、あるいは奈良からしばらく来られた方が、いらっしゃいましたね、全国規模のゾーン・システムの日本で唯一無二の講座として名を馳せるようになりまして、いちど埼玉県警から電話が掛かって来て、埼玉県警の鑑識科ですけど資料下さい、いや何ですかと聞きましたら、実は私しゾーン・システムをやりたいんです。役職外で資料おくれと、そんなこと言うな! と怒って送りませんでしたけどね。そうゆう反響があったんですね、そして軌道に乗り、その後レッツ・フォトは深川君が担当してたんですけど、あとビギナーのコースを設けてみたり、子供の講座を設けたりして、但、原点はゾーン・システムの講座なんです、こんな不思議な話しはあまりないんですけど、それで僕はやったぞ、と思いました。と言うのは、だいたい写真のことをご存じの方に講座の皮切りをお願いした方が学芸員が楽だろう、という、ずぼらな気持ちだったんです。まず、まったく初歩の方から始めますと色々な事を手ほどきしなければならない、ところが慣れていらっしゃるというか、知識のある方ですと、暗室の使い勝手をご存じなわけですね、その中で当時、学芸員としてお世話していかなければならない事、不備なところを埋めていけば良い、そして初学者の人、ビギナーの人にやって頂くノウハウみたいなものを、もち癖して行けば良いと、ずぼらな事を考えまして、告白しておきますが。そういう事で軌道に乗って、今も年一回しか出来ませんが、ほんとうは年二回位いい、やりたいんですけどね、でも人気の講座となって、その後こういう形で中島さんがアフタケアーまでなさってくれて、有り難いと思っております。因みに僕は、去年の3月に川崎市民ミュージアムを辞めまして、まあ理由は色々ありますが、もともと写真の評論が仕事でしたんで、何れまたフリーになると言うか、評論の仕事にたち帰ろうと思っていました。それで5年位いのつもりが7年おりましたので、外に出ました。近況報告ですが、今は、さっきご紹介があったように、評論の仕事をしておりますが、写真の評論の場というのは、豊に潤沢に、そういう場が提供されていることではないので、雑誌でやったり、たまに新聞に書いたりとか、そういう仕事が主になっております。あと学校へ何か所か教えに行ったりしておりますし、今は、実はクラシック・カメラに非常に詳しくいるんですけど、横浜市がメーラコレクションと言うカメラの膨大なコレクションをかったんです、4億円程で買った1万件ばかりのコレクションの整理の指導いいますか、整理現場をやっております。週に2~3日、まあ2日位しか行けませんがいっています。今年の夏には、その展覧会を横浜美術館と歴史博物館の二か所でツーバージョンやる予定で、その企画の仕事を行ったり、それから展覧会関係では夏に林 忠彦さんと、ライフの日本特派員だったカール・マイダンスと言う人の、二人の仕事にたどる戦後日本の50年という展覧会を松屋で行います。その前は土門 拳さんの展覧会です、戦後50年ものが幾つか出て来るんですが、その一駒となる予定なんです。それから今日は今まで東京都写真美術館におりまして、そこで実は写真ビエンナーレと言う審査員をやらされているんですけど、締め切りになりましてね、応募件数が1200名程になりました。ただ、どのように審査会を進めるか、ちょっと整理をしなければならないので、その整理の段取りのチェックに行ってます、それは何日か行かなければならなく、外国から審査員を3人呼んで、あと渡辺 好雄さんと4人でやるんですけど、まあ外の方はビップなんで僕は、どっかと言うと使い走りのような審査員なんですが、そういう仕事をやってお

ります。

今日は、どの様なお話しをしようと思ったんですが、この講座でメインになっておりますが、また心の支えになっておりますのが、アンセル・アダムスだと思えます、アンセル・アダムスと言うのは、さすがに偉大な写真家として、取り分けアメリカのある種のノスタルジックな部分を自然景観にアメリカ人が託して抱いて支えている写真家なんですね、アンセル・アダムスのことを、お聞きになる機会が沢山あると思いますので、深くじゃないですけど、アンセル・アダムスとよく並び称されるエドワード・ウェストンとウォーカー・エバンスがいます、ウェストンのことは、また何れ時間がありましたらお話ししたいと思うんですが、今回はウォーカー・エバンスのことでお話しします。それで日本の写真の文化というのは結構、戦後はアメリカを通じて入って来ております。ですからアメリカの写真の文化というのは、もともとはヨーロッパなんですね。アメリカの写真の文化を理解するためにもヨーロッパとアメリカの関係は時折、意識して頂いたほうが良いと言うことが御座いまして、それで今日は、用意しましたスライドは、ウォーカー・エバンスとかアジェとか、そのあたりを持って来ましたので、お話しします。写真の面白みを理解する上での話しなんですけど、ヨーロッパ的世界を覗いてみようという、そういうことでお話ししたいと思えます。ヨーロッパ的世界と言っても別にヨーロッパの景色を見たり、ヨーロッパの文物を、と言うことではなくアメリカの写真を見て行く上にもヨーロッパに対する一種の憧れだとか、あるいは、もっと外の言葉で言えば帰趨本能と言うか、本家帰りのような気持ちがありますよ、と言う、それで実はそのことを一つ押さえて置くと、我々日本の古い文化と伝統の中に育ちました人間としては、アメリカの写真家の真似をするとか、そういったことではなくて、そして、もう一つ日本の単に伝統的な写真文化のパターンを、なぞるだけでなく、自分自身で見いだす伝統とか文化に対する誇りだとか美意識みたいなものが、もう少しストレートに素直に表現出来るし、楽しめるという気がしています。そう言う観点からアメリカとヨーロッパの関係を見て行く事が面白い参考になるんじゃないかな、と思ってスライドを幾つか持って来ました。スライドの前に、お喋りをさせていただきますと、もう皆さんある程度、写真家の名前だとか、写真の事はご存じだと思うんで、概略をお話しして置きます。アメリカの写真界の大きな出来事と言うのは、まず最初にあったのが南北戦争の記録写真です、そして南北戦争のころ、マッシュ・ブレイディと言う山師みたいな写真家がいて、この人は大変面白くて、有名人の肖像しか撮らない、という商売をしていたんです。有名人しか撮らないと言うことは今の言葉でいうと、つまり差別化ですね、どんどん写真が大衆化して行く中で、1850年代の最初の内は写真が高い為に特別な人しか写真が撮れませんでした。そして始めの写真はダゲレオタイプで、その後アメリカで普及したのは、ピンタイプとかフェロタイプと言ってダゲレオタイプほど、お金が掛からない方法でした。その頃、焼き付けが出来る硝子のネガも発明されていましたし、ダゲレオタイプは段々下火になって行きます。アメリカ人はダゲレオタイプが好きで、長いことダゲレオタイプを使っていました。銀盤写真ですね、ブレイディは焼き付けの奇麗な写真を撮ったんですが、彼は大統領とか次期大統領候補とか上院議員とか市長とか、彼に撮ってもらおうと偉いと言うのが看板になって行くわけです、画家の中にもそういう人がいます。肖像画家でも著名人しか画かない人が、そういう商売をしていたんですね、南北戦争が起って、次のベンチャービジネスを考えたんです、それは戦争の前線写真を撮ることだったんです、これは、色々な人を雇って撮らせたんです、ティモシー・H・オサリバン(1840~1882)とかアレクサンダー・ガードナー(1821~1882)とか凄い上手な人を、しかし自分は危険な所に行かな

いんですね、雇われた人が行かされるもんですから、もめるんですね、その内、雇われた人は造反して出て行きますし、死体がごろごろ転がっている写真なんか売れなかったんです、ですから、こんなの見るの嫌だから早く戦争やめようという厭戦気分につながって行く一幕もあって、写真は、そういう形で市民社会に入っていくんですね、その後は、写真がアメリカの中で使われたのはアンセル・アダムスの仕事とも係わりあいが出て来るんですけど、南北戦争の後アメリカ政府は南軍と北軍が一緒になって一つのアメリカになりますね、でも、ほっておくと又、喧嘩ににりますから、目を外に向けなければならないと言うことでアメリカ国内の中西部の山岳地帯を開拓しよう、と言う事業を始めるんです、その時、南北戦争で活躍した写真家を連れて行くんですね、そうしてコロラドやアリゾナの山脈に入っていくんです。これはウイラーと言う陸軍少尉が隊長となって、キャラバンを組んで山脈に入っていくんですけど、その時にオサリバンと言う人が沢山、写真を撮っているんです、実は、その写真を見ますと、(川崎市民ミュージアムにも有りますが) アンセル・アダムスが撮っていた写真の原点のような感じがします。と言うのはアメリカ人にとって西部の未開の荒野というのは、ここを私らが開拓して行くんだ、この大地こそ新天地だということで、その陰にインディアン達がいて、僕達が居るよ、と言う声が聞こえて来そうなんですけど、とにかく白人達(ヨーロッパ人)にとっては新天地だったんですね、そうゆうふうにして開拓という意識と写真に撮られた西部山岳風景は、かなり密接な結び付きを持ちます。ですからアンセル・アダムスの写真がアメリカ人の原風景を示すものだ、と言うことは、そう言う意味もあります。それと西部開拓の時に写真で大陸横断鉄道の記録なども撮って行き、国が出来て行く過程を写真に撮って行く、これがアメリカ人のやり方だったんです。丁度、写真の発達と、タイミングが合ってますからね、アメリカ人にとって写真と言うのは結構、身近になった写真を上手く生活の豊かさの部分に取り入れて行くタイミングは20世紀の少し前の絵画主義(ビクトリア)の写真が流行ったころです。特にバッファローあたりを中心にビクトリアリズムが流行りまして、そういった流れの中からゲルトルーデ・ケーゼビア(1854~1934)とか色々な写真家が出て来たりしました。それでビクトリアリズムに一時期は共鳴したんですけど、実はまったく違った見解を出して、アメリカの写真界に大きな衝撃を与えたのが、ニューヨークの近所に生まれまして、ヨーロッパへ勉強に行ってて20世紀になった頃、帰って来たアルフレッド・スティーグリッツ(1865~1946)だったんです。スティーグリッツは非常に面白い人なんですけど、お父さん、お母さんが、ユダヤ系ドイツ人です、お父さん、お母さんの仕事は織物工場をニューヨーク郊外に持っていました。それは移民して来て非常に事業が旨く行き結構金持ちになったんです。ところが教育は、本国のドイツが良いだろう、と言うのでヨーロッパへ勉強に行かせます、そしてヨーロッパで写真を覚えて来たスティーグリッツは写真だけではなく芸術の、いろんな物を覚えて来たんですね、そしてヨーロッパとアメリカの芸術の懸け橋になって行くんです。彼が面白いのは、ヨーロッパから前衛の芸術家を、ドンドン連れて来るんです、それで仕事させて、又、ヨーロッパへ送り帰す、ということをしていました。単にヨーロッパの物をアメリカと言う新天地に輸入するのではなくて、一回輸入したら、そこで増殖させて、本家に投げ返すという、マルセル・デュシャンと言うアーティストが居たんですが、まさに彼が、その典型でして、ダダイズムという運動を当時してしまっていて、つまり資本主義の価値観にアートが全部、組み込まれてしまうのは、やだよ、と言う異議の申し立ての運動ですが、その運動はシュレーアリズム(超現実主義)に繋がって行くんですけど …… 続は次回会報 第3号

中島 秀雄先生 写真展 近づく

※ゾーン・システム研究会の会員の方には、11月9日(木) PM6:30より会場にて中島先生から作品の説明を頂けます。
是非参加して下さい。

尚、写真展の後、有志の方のみで親睦会を行いたいと思いますので、ご参加下さい。

中島秀雄写真展

[River]

1995 11/7[TUE]—11/19[SAN]月曜休廊

12:00PM—7:00PM

11月7日 5:00PM~7:30PM オープニングパーティー

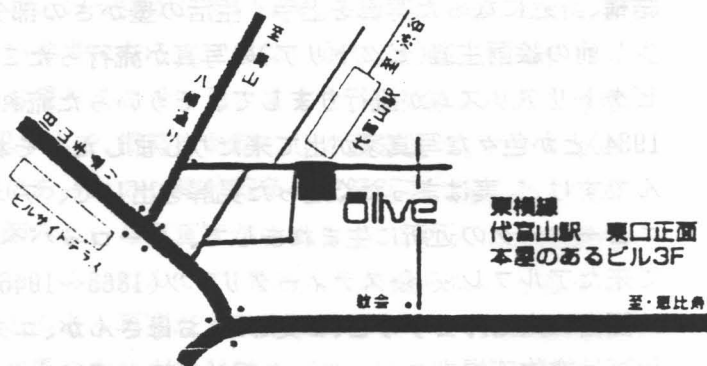
自然の変化や美しさを求めて最近川の源流を歩いています。水の流れや岩の形、雪や氷、枯葉や流木、これらが光や時間とともに変化していく中で、時々現れる純粹な形に興味をもっています。自然の中で起きている変化を見ぬくことは時々自分以上の何かを感じたりもします。

GALLERY
olive

〒150 渋谷区恵比寿西1-34-28

代官山ファーストビル3F

ギャラリー・オリーブ TEL.03-3496-2566



1995年度活動結果

1995年7月29日(土)30(日) 第2回撮影会 小部 先生指導による青木ヶ原の樹海撮影を開催しました。撮影指導も含め小部先生の作品レクチャーや先生の特技な暗室を拝見出来、とても普段、経験できない素晴らしい2日間でした。

10月12日(木) 幹事会開催(恵比寿ルノアール) '96グループ展について。テーマをどう決めるか? 例会をどうするか。

※ゾーン・システム研究会事務局では、事務局にいました吉田 公子が現在エコール・ナショナル・ドゥ・ラ・フォトグラフィ(フランス国立写真学校)に留学中です。このチャンスに来年フランスに遠征する計画を考えています。もしこの計画が実現しましたら、吉田が全て皆さんを、ご案内いたします。

出来ることであれば会員の皆さんのご意見、ご希望を事務局まで、はがきにてお寄せ下さい。